



私立女子美術学校創始者横井玉子の夫左平太と弟大平の渡米前後の書翰(10)「横井家文書」所収の横井左平太書翰から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 女子美術大学 公開日: 2024-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堤, 克彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://joshihi.repo.nii.ac.jp/records/2000052

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



私立女子美術学校創始者横井玉子の 夫左平太と弟大平の渡米前後の書翰(10)

「横井家文書」所収の横井左平太書翰から

▶堤克彦

はじめに

このシリーズは、熊本大学附属図書館寄託の「横井家文書」所収の横井左平太・大平書翰二十七通をもとに、その紹介とその背景の解説を『女子美術大学紀要』第45号(2014年度)から始め、本号で十回目、十年を迎えた。

明治八(1875)年七月二日、伊勢佐太郎(横井左平太)が海軍省に提出した^③A131「伊勢佐太郎履歴」(後号掲載)によれば、再渡米した横井左平太(三十歳)は、明治七(1874)年四月八日まで「ワシントン」に滞在していたが、翌九日には政府の帰国命令に従って「ワシントン」を辞して帰国、五月十三日に横浜港に到着した。

そのこともあってか、明治七(1874)年の左平太の書翰は「横井家文書」には一通も見当たらない。しかし明治八(1875)年になると、七通の関係文書がある。その内訳は今回の横井左平太宛「長岡護美書翰」と後号で紹介する事務的公文書類である。

左平太(三十一歳)は、帰国してまる一年後の明治八(1875)年六月に、元老院権少書記官に任命されたが、渡米中に弟大平の肺病を看病中に自身も罹患していて、同十月三日には同病で死去している。

一、横井左平太宛「長岡護美書翰」

(在英、明治八年五月十八日)

今回の^④A138「長岡護美書翰」(在英、明治八年五月十八日)は、肥後藩主斉護の庶子(嫡子以外の実子、跡取り以外の子の総称)長岡護美(細川護美、本文では細川護美とする)が、伊勢佐太郎(横井左平太、在東京)に宛てに出したもので、左平太が元老院権少書記官任命直後に届いたと思われる書翰である。

24	A138	長岡護美書翰(在英、明治八年五月十八日)・伊勢佐太郎宛(在東京)
----	------	----------------------------------

^④A138 長岡護美書翰(在英、五月十八日)・伊勢佐太郎宛(在東京、六月、元老院権少書記官任命)

【封筒】

表

伊勢佐太郎 殿
従英國
長岡護美

裏

長岡
Reciued(まゝ、Recitedか)
July 20th 1875

この封筒の表書には、宛先の住所も切手もまた消印もないので、護美が英国から帰国する者(不詳)に依頼したものと考えられる。後述するように、書翰の日付は明治八(1875)年五月十八日であるが、裏書には「July 20th 1875」とある。これは帰国者に託した当日の日付であろう。その間一か月ほど、信頼して託せる帰国者が見つからなかったことになる。

【釈文】

出来仍旧御清安奉賀候。僕儀、厄国(アンゲリア、厄里亜里の略。イギリス)留学罷在候条、御休慮可被下候。近来ハ天氣も順和ニ而、愈以壯健勉学、亜國(米国)滞在之節とは雲泥之相違ニ而御座候間、御安慮可被下候。

教師も誠ニ兄弟の如く相交り、其傍ニ相寓し候。雖龍動(ロンドン)府凡六十里南隅之海村(ブライトン〔Brighton〕)かニ而、学問之為ニは至極宜敷、殊ニ仏之教師も、過月来手ニ入り、英ノ歴史等且經濟書等ニ管(まゝ、関)する教師共三人ヲ相手ニいたし、昨十月(明治七〔1874〕年十月)来勉学、尤此節の仏ノ教師ハ、過月の初二手ニ入り申候。

僕の英文ハ、別帋(紙)三冊ニ而御笑察可被下候。政體律令書は、素より僕の兼而目的ナレトモ、文学ノ味ヒ近来深く、夜ニシエキスピヤ(シェークスピア)、且ノーヴェル(novel、長編小説)等ニ眼をサラ(曝)シ、来夏(明治九〔1876〕年夏、来年の夏の意)帰様(帰国・帰郷の意か)之節は、必御失望無之よふ心掛居申候。

賢兄ヲ思事ノ實ニ切ニテ、帰朝之念は素ヨリ有之候得共、勉学亦味ヒ深く、僕ノ本意は、今三年(あともう三年の意か)モ滞英イタシ度、シカシ母(生母、家臣飯洞氏女・長)

アルヲ如何ントモセス。仍而先ツ帰朝ニ決シ居申候。

今般馬場(辰猪)氏帰朝ニ就而幸便故、同氏ニ託し、僕ノ情状(実情)ハ、旧知事(兄細川護久)公へ申可置候。僕當八月初旬より各國え経歴仕り候故、仏語学ヲ勉強罷在候。如何ントナレハ、炎暑後、即下(すぐ)ニ無之候而は、スウキツ(スイス)ノ彼アルプス山も見物之都合不宜、仍而帰様(帰養)之節ハ、サヲツハムプトン(サウサンプトン、Southampton)ヨリ乗船、ジブラルタル(ジブラルタル海峡)ヲ交廻し候方ニ相決し申候。

平山和尚(平山成信か)・菅野大英雄(菅野角兵衛)・白根雄談君(白根専一)等、無事と相考へ候。芙蓉峰(富士山)之邊を見て、一盃を差酌候事迄相考申候。坪井(坪井伊助)氏之新婚を新聞紙ニ而一覽仕、不堪一笑、餘程美人之よしニ而、最早黒奴(まま、黒土か)之愛ハ被止候事と呈察仕候。

僕儀ハ、亜國の所置(出来事)は夢にも不見、昨十月(明治七〔1874〕年十月)来之勉強ハ、恐らく英國九生(英國留學生九人)ニ肩ヲ譲り不申候。

仏・日(日耳曼〔ゼルマン〕の略、ゲルマン、ドイツ)之間、再ヒ戦争(普仏戦争〔独仏戦争])之勢有之候得共、英・魯(ロシア)等之取捌キニ而、先ツ相止ミ申候。尤魯帝(ロシア皇帝)之尽力、餘程日(ゲルマン・ドイツ)ニ徹し候趣ニ相見へ申候。しかし数年を不出、此態必ス起ルノ勢ナリ。西班牙(スペイン)之新主、于今勢漸々とし而ハ、向後如何ンヲ知ラス。

本邦今日之形状御承知候も候ハ、御報知可被下候。賢兄(伊勢佐太郎)ハ即今海軍大輔ニ被叙候と相察申候。御一笑可被下候。

昨夏スコットランド(スコットランド)ノ獨遊ハ、英語ニ而便ヲ得候處、今般ワ先ツ仏語ガチナリ。シカシ是非七月マテニは、僕ノ亜ニアリシ時ノ英語丈ニは、仕付(身につけ)申候企ニ候。

岩男氏も無事勉強、素より僕獨今ながら、同人ニ圖事(図り事、謀、将来の計画の意か)等出来候節は、重疊世話いたし候間、御安心可被下候。僕即今態とあまり出會不仕、しかし僕ノ意ハ、賢兄(左平太)能く知て、決而到底彼人(岩男俊貞)ニ對し、兎角之存意無之、此段ハ御面会之上、御一笑可被下候。

しかし俊貞先生等へ萬一彼眼前之了解を以而、兎角之通信等有之候而は、僕の本意ニ無之候間、賢兄御含置可被下候。帰朝之上笑ニ崩し候筈ニ御坐候。僕よりハ更ニ關係いたし不申候間、此段ハ他日友人等之談話ヲも御聞取可被下候。

何様昨年(明治七〔1874〕年)別途費用相わたし候後、今更僕より別途相わたし候も、すこしく名義相立不申候。殊ニ當人(岩男俊貞)自費ニ而、一トシメ(一締め、さらに一段)苦慮いたし候節、他日之為と相考候次第も有之、御呈察可被下候。何様此上ハ彼人の望候丈、滞英勉強可然相考へ申候。しかし僕ノ獨立(単独留学)ハ深き意中有之候間、必御安心可被下候。何卒英語等相達之候様相願候。

當時ハ井賀陽太郎兄(伊賀陽太郎)・菊池大八(菊池大麓)・原六郎等、文学社ニ而、時ニ文通仕候。其他差而文通等も不仕、尤馬場(馬場辰猪)龍働(まま、龍動(ロンドン)、不遠着英と相考へ申候。且鍋島兄弟(鍋島直虎・直柔)ハ時々相互ニ往来仕候。尤僕ハ龍動(ロンドン)ニも一月一度日がへりニ出張すれとも、彼兄弟代る々々来られ候。来秋(明治九〔1876〕年秋)ハ拜語、山海の如く談説(話す内容)を貯工(まま、エ)申候。

俊貞先生と議論相樂ミ居候間、宜敷御一聲可被下候。僕も亜國在留(滞米留学)之節と違ヒ、再ヒ壯健を得、再ヒ論客ニ相成り申候。しかし政事之議論ハ受ニ不仕、別紙三冊ノ面ニ而、御遠察可被下候。

僕ノ強意ハ、先ツ先ワ政事論ハ容易ニ議し不申候得共、人民進歩之基ヒ、萬学ノ起る處ニ盡力いたし度、今二年(さらに二年の意か)滞英候得は、井上(井上毅)・内賀田(不詳)等之法律論を聴聞いたし度、法律ノ本體ヲ知ルヲ要トス。

雑技(いろいろな技術の意か)素より知るへし。しかし雑技ハ時ニ仍而変遷ス。此議論ハ深く味ヒ居候間、御面会之節言上可仕候。知己之面々ニ宜敷御一聲、元田(永孚)・山田(武甫)・大田黒(惟信)等ニも宜敷奉願候。

何レ不遠米田(監物、是豪)等へハ一昏(紙)差おくり候筈ニ御坐候。しかし差而簡要之事(大切なこと)も無之候間、兎角等閑ニ(のんびりと)打過申候。匆々不及候。(簡略の意か)

五月十八日

長岡護美

伊勢佐太郎兄

侍史

別紙三冊ハ一月後便、出板之上差出申候。

巨而(追伸)

此節は逆も一應 帰朝不仕候而ハ難相成相考候間、決定仕居、僕英國より直ニ来夏上旬四月二日乗船之覚悟故、萬一は今一年滞英等ノ御催議ニ相成候得は無此上、僕よりハ竟ニ(ついに)帰朝ニ相決し居、命(帰国命令か)を俟居候事ニ御座候。

半途之帰朝ハ、其遺憾限りなしと雖も、親を思ふ之情も亦切ナリ。嗚呼之を如何ンセむ。

(横縦書の追加)

第四月二旬ニ差許レ發シ候得ハ、五月ノ末或ハ六月上旬、支那海え着、至極の時候ニ而、海上之平安なり。

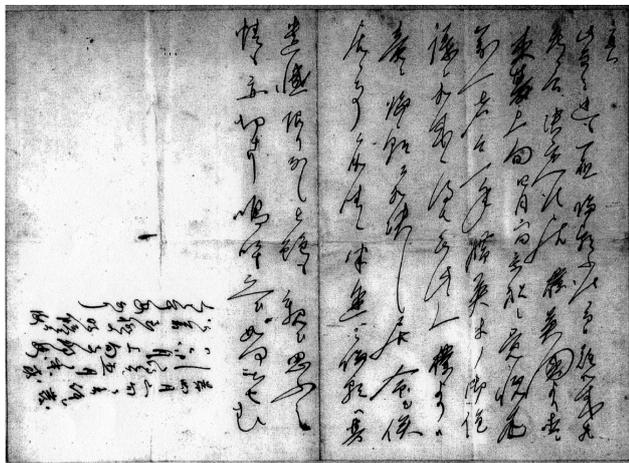
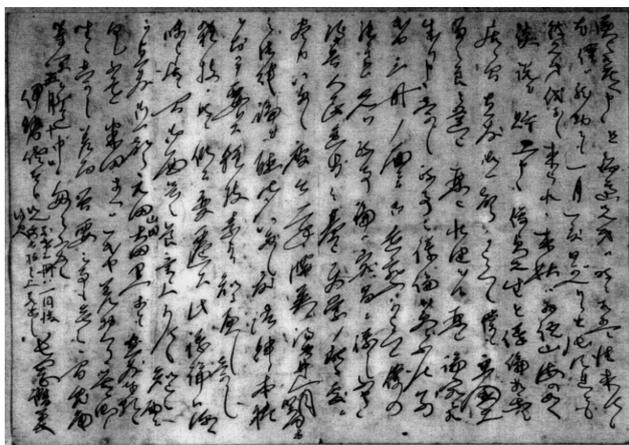


写真1 長岡護美書翰(五枚のうち四枚目〔上〕と五枚目〔下〕)

【読み下し】

出来(出来栄え、仕事がうまく行っているの意か)仍旧(じょうきゅう、旧来より)御清安賀し奉り候。僕儀、厄国(アンゲリア、厄里亜里の略。イギリス、幕末期にはエグレス・アンゲリアの呼称)留学罷り在り候条、御休慮下さるべく候。近来は天気も順和にて、愈よ以て壮健勉学、亜国(アメリカ)滞在の節とは雲泥の相違にて御座候間、御安慮下さるべく候。

教師も誠に兄弟の如く相交り、其の傍に相寓し候。龍動

(ロンドン)府(ロンドン行政府)と雖も凡そ六十里(60哩、96.5km)南隅の海村(ブライトン[Brighton]か)にて、学問の為には至極宜敷く、殊に仏(フランス)の教師も過月(先月)来手に入り、英(イギリス)の歴史等且つ經濟書等に関する教師共三人を相手にいたし、昨十月(明治七〔1874〕年十月)来(すでに8カ月程)勉学、尤此の節の仏の教師は過月(先月)の初めに手に入り申し候。

僕の英文は、別紙三冊にて御笑察下さるべく候。政体律令書は、素より僕の兼て目的なれども、文学の味わい近来深く、夜に「シエキスピヤ」(シェクスピア、William Shakespeare 1564~1616)、且つ「ノーヴェル」(novel、長編小説)等に眼をさら(曝)し、来夏(明治九〔1876〕年夏、来年の夏の意)帰様(様には方向・目的の意あり、帰国・帰郷)の節は、必ず御失望之れ無きよう心掛け居り申し候。

賢兄を思う事の実に切にて、帰朝の念は素より之れ有り候得共、勉学亦た味わい深く、僕の本意は、今三年(もう三年の意、明治十〔1877〕年迄か)も滞英いたし度く、しかし母(生母、家臣飯洞氏女・長)あるを如何んともせず、仍つて先ず帰朝に決し居り申し候。

今般馬場(馬場辰猪)氏帰朝に就いて幸便故、同氏に託し、僕的情状(実情)は、旧知事(細川護久、護美の兄)公へ申し置くべく候。僕当(明治八〔1875〕年)八月初旬より各国へ経歴仕り候故、仏語学を勉強罷り在り候。如何んとなれば、炎暑後、即下に之れ無く候では、「スウキツ」(スイス)の彼のアルプス山も見物の都合宜しからず、仍つて帰様(帰養)の節は「サラムプトン」(サウサンプトン[Southampton]、イギリス南部、ロンドンの外港、大西洋航路の発着)より乗船、「ジラルタル」(ジブラルタル海峡)を交廻(經由航海)し候方に相決し申し候。

平山和尚(平山成信か)・菅野大英雄(菅野角兵衛)・白根雄談君(白根専一、1849~98、官僚・政治家)等、無事と相考え候。「芙蓉峰」(富士山)の辺を見て、一盃を差し酌み候事迄相考え申し候。

坪井氏(坪井伊助、1843~1925、篤農家、竹林博士)の新婚を新聞紙にて一覽仕り、堪えられずに一笑、余程美人のよしにて、最早「黒奴(まま、黒土か)の愛」は止められ候事と呈察仕り候。

僕儀は、亜(アメリカ)国の所置(出来事)は夢にも見ず、昨十月(明治七〔1874〕年十月)来の勉学は、恐らく英国九生(英国留学生九人)に肩を譲り申さず(引けを取らないの意か)候。

仏・日(日耳曼〔ゼルマン〕の略、ゲルマン、ドイツ)の間、再び「戦争」(1870~1年の「普仏戦争」〔独仏戦争])の勢い之れ有り候得共、英・魯(ロシア)等の取捌き(仲裁)にて、先ず(ひとまず)相止み(解決)申し候。尤魯帝(ロシア皇帝)の尽力、余程日(ゲルマン・ドイツ)に徹し候趣に相見え申し候。しかし数年を出でず、此の態必ず起るの勢いなり。西班牙(スペイン)の新主、今に勢い漸々としては、向後如何んを知らず。

本邦(日本国)今日の形状御承知候も候わば、御報知下さるべく候。賢兄(伊勢佐太郎は明治八年六月、元老院権少書記官。十月三日死去)は即今海軍大輔に叙せられ候と相察申し候。御一笑下さるべく候(笑って済ませることか)。

昨夏スコットランド(スコットランド)の独遊(一人旅)は、英語にて便を得候処、今般は先ず仏語がち(主流)なり。しかし是非七月までには、僕(アメリカ)にありし時の英語丈(英語と同じくらい)には、仕付け(フランス語を身に付け)申し候企てに候。

岩男(岩男俊貞)氏も無事勉学、素より僕独り今ながら、同人に凶事(凶り事、謀、将来の計画の意か)等出来候節は、重畳世話いたし候間、御安心下さるべく候。僕即今態とあまり出会い仕らず(わざわざ連絡を取っていないの意か)。

しかし僕の意は、賢兄(左平太)能く知りて、決して到底彼人(岩男俊貞)に対し、兎角の存意之れ無く、此の段は御面会の上(岩男俊貞と会って)御一笑下さるべく候(一笑に付す、問題なく済むことか)。

しかし俊貞先生等へ万一彼眼前の了解を以て、兎角の通信等之れ有り候ては、僕の本意に之れ無く候間、賢兄御含み置き下さるべく候。帰朝の上笑い崩れし(大笑い)候筈に御座候。僕よりは更に関係いたし申さず候間、此の段は他日友人等の談話をも御聞き取り下さるべく候。

何様昨年(明治七〔1874〕年)別途(別に)費用相渡し候後、今更僕より別途(また改めて)相渡し候も、すこしく名義相立ち申さず候。殊に当人(岩男俊貞)自費にて、一トシメ(一づ、さらに一段)苦慮いたし候節、他日の為と相考え候次第も之れ有り、御呈察下さるべく候。何様此の上は彼人の望み候丈、滞英勉学(英国留学か)然るべく相考え申し候。しかし僕の独立(単独留学)は深き意中(考え)之れ有り候間、必ず御安心下さるべく候。何卒英語等之れを相達し(十分な修得・熟達)候様相願ひ候。

當時は井賀陽太郎兄(伊賀陽太郎)・菊池大八(菊池大麓)・原六郎等、文学社にて、時に文通仕り候。其の他差し

て文通等も仕らず、尤馬場(馬場辰猪)龍働(まま、龍動(ロンドン)、遠からず着英と相考え申し候。

且つ鍋島兄弟(肥前藩主鍋島直正の七男弟直虎・八男直柔〔なおとう])は時々相互に往来仕り候。尤僕(龍動(ロンドン))にも一月一度日帰りに出張すれども、彼の兄弟代るがわり来られ候。来秋(明治九〔1876〕年秋)は拜語、山海の如く談説(話す内容)を貯工(貯エか、または貯え工夫するの意か)申し候。

俊貞(岩男俊貞 未詳~1883)先生と議論相楽しみ居り候間、宜敷く御一声下さるべく候。僕も亜国(アメリカ)在留(滞米留学)の節と違い、再び壯健を得、再び論客に相成り申し候。しかし政事の議論は受けに仕らず、別紙三冊の面にて、御遠察下さるべく候。

僕の強意は、先ず政事論は容易に議し申さず候得共、人民進歩の基、万学(あらゆる学問の意か)の起る処に尽力いたし度く、今二年(さらに二年の意か)滞英候得ば、井上(井上毅、司法省から1872年仏・独派遣)・内賀田(不詳)等の法律論を聴聞いたし度く、法律の本体を知るを要(かなめ)とす。雑技(いろんな所論の意か)素より知るべし。しかし雑技は時に仍つて変遷す。此の議論は深く味わい居り候間、御面会の節言上仕るべく候。

知己の面々に宜敷く御一声、元田(永孚、侍講)・山田(武甫〔五次郎〕、小楠門弟・四天王〔徳〕、熊本県権参事、公議政党創立委員)・大田黒(惟信〔亥和太〕、藩士、熊本県少参事、後県民会議長)等にも宜敷く願ひ奉り候。

何れ遠からず米田(監物、是豪・虎雄〔虎之助])等へは一紙差しおくり候筈に御座候。しかし差しして簡要の事(大切なこと)も之れ無く候間、兎角等閑に(のんびりと)打ち過ぎ申し候。匆々及ばず候。(書翰の内容が簡略過ぎて十分ではないの意か)

(明治八年)五月十八日 長岡

別紙三冊は一月後便、出版(出版)の上差出し申し候。

亘りて(追伸)

此の節は拙も一応 帰朝仕らず候わでは相成り難く相考え候間、決定仕り居り、僕英国より直に来夏(明治九〔1876〕年夏、四・五・六月)上旬四月二日乗船の覚悟故、万一は今年(後一年、明治十〔1877〕年まで)滞英等の御催議(延長の決議か)に相成り候得ば、此の上無く(最高であるが)、僕よりは竟に(ついに、既にの意か)帰朝に相決し居り、命(政府の帰国命令か)を俟ち居り候事に御座候。半

途の帰朝は、其の遺憾限りなしと雖も、親を思うの情も亦た切なり。嗚呼之れを如何んせむ。

(横縦書の追加)

第四月二旬(11日～20日の間)に差し許され発し候得ば、五月の末或は六月上旬、支那海へ着、至極の時候にて、海上之れ平安なり。

二、長岡護美(細川護美)について

まず「肥後藩主細川家略系図」を掲載し、長岡護美(細川護美)の細川家での出自について見ておきたい。

1、細川護美の幼少期と時代背景

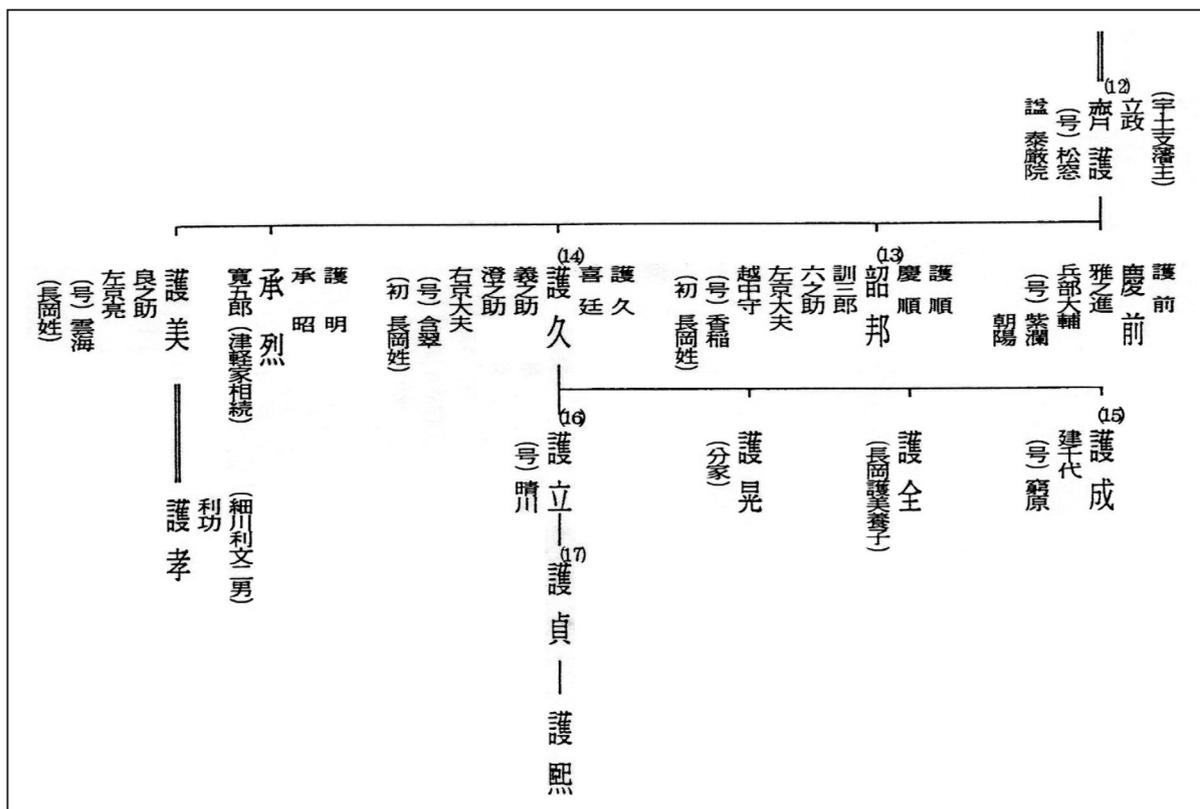
嘉永六(1853)年六月の「ペリー来航」から所謂「幕末」期が始まると、従来の徳川幕府を中心とした「幕藩体制」は動揺しながら大きく変貌していった。そして十五代将軍慶喜の慶応三(1867)年十月の「大政奉還」を機に、尊攘派を中

心とした討幕派は、十二月には「王政復古の大号令」のクーデターを実施、薩長両藩はそれ以前の慶応二年一月の「薩長同盟」での密約通り「武力討幕」に踏み切った。

討幕派は「政府軍」(官軍)として、慶喜を慶応四(1868)年一月「鳥羽伏見の戦い」の引きずり込むことに成功し、それに続く「戊辰戦争」では、徹底的な「武力討幕」を断行、その一方で「明治維新」を具体化し、明治政府は「天皇制中央集権国家」体制を打ち立てた。

この変動期の肥後藩では、十二代藩主斉護(なりもり)は嫡子慶前(よしちか)を十三代藩主にすべく君主教育を行っていたが病没した。次男の韶邦(よしくに)が十三代藩主となったが、時代は明治となり、明治二(1869)年六月十七日の「版籍奉還」を機に、初代の「藩知事」(知藩事)に任じられたが、翌三年五月八日に隠居した。その約1年後、三男護久(長岡姓・澄之助、1839～1893 享年五十五歳)が、明治四(1871)年七月十四日の「廃藩置県」を機に、第二代「藩知事」に就任した。

この新造語「藩知事」はその間の世情を映している。即ち



肥後藩主細川家略系譜

幕府体制の名残である「藩」体制存続のまま、新政権の明治政府は中央集権的な地方制度として「知事」を配置した。明治政府は着実に、また強引に中央集権化を進め、前述のごとく明治二(1869)年六月に「版籍奉還」、同四(1871)年七月に「廃藩置県」を断行して、「幕藩体制」を完全に消滅させた。

この間、護久は「知藩事」として「藩政改革」を行い、象徴的な「村々小前共ニ」を布告し、肥後藩時代の雑税廃止の実施と本年貢軽減の実施を予告した。弟の護美(長岡姓・良之助、1842~1906 享年五十六歳、以下細川護美と称す)は、兄と共に明治初期の肥後藩の舵取りをした中心的な人物であった。

熊本県教育委員会編『熊本県近代文化功労者』(熊本県教育委員会 1981年)所収の鈴木喬の「長岡護美」によると、護美は、弘化二(1846)年下野喜連川氏の養子に内定、嘉永三(1850)年に正式な養子(元服後、宜氏)となった。しかし安政五(1858)年、尊王論の影響を受け、足利氏の流れを汲む喜連川家の家風に合わず、夜逃げ同然の行動を起こし、再び肥後細川家にもどり、「長岡護美」(細川護美)と改名した。

この頃の護美は、幕府からも瞩目されていたが帰藩、その後は長岡監物(是豪)の下で、大いに学問に勤しんでいた。

2、細川護美の「洋行」決意

細川侯爵編纂所の『長岡雲海公傳』(民友社 1914年)は、第一巻の池邊義象の「緒言」によれば、明治四十四(1911)年十二月下旬に上梓されている。その第三巻には「第九章 洋行時代」(自明治五年正月至同十二年正月)がある。引用文の()は引用者注。

その「洋行時代」によれば、長岡護美(細川護美、雲海)は、「公(護美)兼て洋行修学の志あり、たまたま朝廷令を下して、大藩三人、中藩二人、小藩一人の割を以て、海外視察に赴かしむべき旨」に応募して選ばれた。もともと「海外視察」の公募であったが、いよいよ東京出発直前に「延議一変」して「自費」となったため「留学」を希望したと思われる。

その細川護美(当時31歳)は「必しも官選を希ふ身にもあらざれば、自費洋行に決し」、まず明治政府に参内・拝謁、続いて勝海舟・西郷隆盛・岩下方平ら諸先輩と協議し、明治五(1872)年正月二十日に出航した。

その壮行会の酒宴後、漢詩七律「将赴米洲開宴於百尺樓上醉後所作」(将に米洲に赴かんとす、百尺樓上に於いて宴を開く、醉後に所作す)と題し、つぎのように詠んでいる。

【漢詩】

芙蓉白雪映盃妍 清嘯應聞落九天 擬摘星辰當酒計 且吞
江海作詩仙 若無黃鶴樓頭句 定有青蓮醉裏篇 欲試鵬搏
九州小 長風好放五洲船

【試訳】

富士高嶺の白雪が盃に映えて美しい。清らかな嘯き(清らかな吟詠)はまさに聞けば天上も落つべし。星辰(星座)を摘むは、まさに酒を計るに似るべし。かつ大河と大海を呑めば詩の大家李白になれるという。若し崔顥の「黄鶴樓」の第一句「昔人已乘黄鶴去」(昔人已に黄鶴に乗りて去らん)無くんば、定めて青蓮(青蓮華・仏眼)は醉裏(酔中)の篇(詩歌の中)に有り。鵬(想像上のおおとり)は九州の小(ちっぽけな自分)を搏ち(強く刺激を与え)て試さんと欲す。遠くまで吹いて行く風は良好で、世界に向けて船を放たんとす。

この七律の最後の「欲試鵬搏九州小 長風好放五洲船」から、細川護美の並々ならぬ渡米への決意と意気込みを感じ取ることができる。既述のように、旧藩知事細川護久の弟護美にとって、米国への「自費留学」であっても、必ずしも経済的に大きな負担ではなかった。この点でも、横井左平太・大平の日本最初の密航渡米留学およびその後の滞米中の経済的苦労とはまさしく雲泥の差であった。

3、細川護美の米・英留学の経緯

細川護美の自費による米国留学について、前掲の『長岡雲海公傳』巻三「第九章 洋行時代」によりて、簡単にその経緯を見ておきたい。

同巻所収の「史談速記録・未刊」では、護美の談に「下に附いて行く者は極まらぬで居った」とあり、岩男俊貞の名は一切出てこない。しかし横井左平太の明治六(1873)年十月二十日付の書翰には、細川護美の名と共に岩男俊貞の名が記されていた。即ち細川護美の自費での米国留学には、岩男俊貞と弟の岩男三郎が供人として一緒に渡米していた。

護美たちは、明治五(1872)年一月二十日に横浜港を出航、四月一日に「紐育」(ニューヨーク)に到着した。その後岩男三郎は、護美と兄俊貞とは別行動を取っている。

護美は岩男俊貞と行動を共にしていたが、両人が同じ大学に留学したかどうかは定かではない。護美に関していえば、「紐育」(ニューヨーク)到着後、四月十八日より十月

十八日まで、ニューイングランドの「コネチカット」(コネティカット)州の「ニューゼルシー」(New Jersey、ニュー・ジャージー)に留学、十月二十七日より明治六年九月二十九日まで「マサチューセツト」(マサチューセツ)州の「ボストン」に留学、そして同年十月十五日より明治七(1874)年四月十七日まで「華盛頓」(ワシントン)留学をしていた。

アメリカでは九月が新学期であるので、護美の各学校での留学期間は、長短はあっても学期は守っていたが、ワシントン留学では年度途中の四月に退学していた。護美が急に「英国留学」を決意したことを物語っている。

ただ護美はニューヨーク着後に会った村田新八のフランス行きの誘いを断った際、「私は亜米利加に一年居る積りで、最初から出たのであるから」(「史談速記録・未刊」とい、もともと長く滞米するつもりはなかったのである。

細川護美は、ワシントンでは前述のごとく、左平太の書翰通り左平太と「同居」していた。左平太が明治七(1874)年四月九日に帰国命令を受け、「ワシントン」を出航した。その約一週間後に、護美は単独で渡英している。

護美は、明治七(1874)年四月十七日まで留学していた「華盛頓」(ワシントン)から、4日後の四月二十一日にボストンを発して、英国留学を実行した。同年五月四日にリバプール着、六月十二日より明治八年十一月十日まで「クロイトン(クロイドン[Croydon]、ロンドン府の南端)留学」、その後明治十一(1878)年まで「倫敦(ロンドン)留学」、専ら法学を修め、秋に「ミッドル・テンプル」(ミドル・テンプル、法曹界の聖地)で「法学状師(ハリストル)の学位」を取得している。

護美は「ミドル・テンプル」での「法学状師(ハリストル)の学位」の取得にこだわったのは、非常に名誉ある学位であったからであった。因みにこの「法学状師(ハリストル)」は、現在では「法廷弁護士(バリスター[barrister])」と言う。

ロンドン・シティ内の地図には、「ミドル・テンプル」は現在「テンプル」(高等法学院)と記されている。

インターネットによれば、現在のテンプル教会はミドル・テンプルとインナー・テンプルの二つの法曹院(イギリスの法廷弁護士の育成・認定を行う組織)によって運営維持されている。現在のテンプル地区はイギリスの中世からの伝統を持つ法曹院などが存在する法曹養成の地として名高い。その法曹院の一つであるミドル・テンプルには1574年に建てられたミドル・テンプル・ホールがあって、映画の撮影によく使われているという。



写真2 (『長岡雲海伝』第一巻)
英国にありける日よめる 源護美
こと国に八とせの春を迎ても心にきえぬ富士のしら雪

明治十一(1878)年の秋に「ミッドル・テンプル」での「法学状師(ハリストル)の学位」を取得したが、「洋行時代」には「公は在学中、曾て国際公法編纂協会の終身会員に選挙せられ、また商工協会の委員に挙げられたり」と記す。

護美は、その冬には帰途につき、翌十二(1879)年一月十日に帰朝し、長崎に到着、直に熊本に帰った。護美はまる8年にわたる米国・英国留学を無事終えている。

また『長岡雲海公傳附録』巻五(民友社 大正三〔1914〕年)には、護美が卒業当日に詠んだつぎの漢詩も収録されている。

【漢詩】

英國法鬻卒業日作
遠遊萬里學洋音、鬻舎業成初載簪、莫笑衣冠隨俗變、芙蓉白雪照丹心

【試訳】

英国法鬻(ミドル・テンプル、法曹界の聖地)を卒業の日
に作る
遠く万里に遊び、洋音(英語などの言語)を学ぶ。鬻舎(ミドル・テンプル)の業成りて(法学状師[ハリストル]の学位取得)、初めて簪(白色冠、法廷正装のかつら〔写真3〕)を載せり。笑ふ莫れ、衣冠(卒業式の正装)の俗(英国風)に従

いて変わるを。芙蓉(富士山)の白雪丹心(赤心、真心)を照らす。

【大意】

英国の法曹界の聖地「ミドル・テンプル」を卒業する日に作った

日本から遠く離れた万里の英国に留学して、英・仏などの西洋の学問や言語を学んだ。「ミドル・テンプル」付属の法学校の学業を無事に終え、「法学状師」(ハリストル)の学位を取得し、今日の卒業式に「白色冠」をかぶった。今日の私は英国風の卒業式の正装を身にまとい、日本離れの格好をしているが笑わないでほしい。私にとって、この「白色冠」は富士山の白雪そのものであり、これが日本への私の真心を照らしている。

この漢詩は、護美が学位と「法学状師」の資格を取得した直後の喜びと満足を詠じたものであった。また写真2の色紙「英国にありける日よめる 源護美、こと(異)国に 八とせ(年)の春を 迎ても 心にきえぬ 富士のしら雪」の和歌は、護美は帰国寸前の心境を詠じていたもので、離英するまでの気持ちと望郷の念を歌ったものと解しているが如何。



写真3 明治十一(1878)年英国で撮影・37歳
(『長岡雲海伝』第一巻)

護美は米国・英国での通算8年(1872~1879)もの長い留学期間を振り返り、すべてを終えて、日本に帰国できる思い、いますぐにも郷里に帰れる嬉しさに、自然と沸き起こる望郷の念が抑えきれずにいた。いずれも最も日本的な象徴的情景(護美の漢詩や和歌には「富士山の白雪」を詠じたものが多い)として、この時も「富士山の白雪」を詠んでいた。

三、「長岡護美書翰」の解説

さて細川護美の伊勢佐太郎(横井左平太)宛の明治八(1875)年五月十八日付の「細川護美書翰」について見ていくことにしたい。護美は左平太がワシントンを出航する直後の明治七(1874)年五月四日にはリバプールに到着し、英国での留學生生活が始まっていた。

この書翰は、それからちょうど一年後に、すでに帰国していた左平太宛に出されたものであった。左平太が明治八年六月に、元老院権少書記官に任命される直前の日付であった。

しかしこの左平太宛の書翰は、明治八(1875)年五月十八日の日付で書かれていたが、すでに見たように、最終的に封筒裏に記されたほぼ1ヶ月後の「July 20th 1875」、即ち明治八(1875)年六月二十日に帰国者に託されていた。この書翰が左平太の手元に何時届いたかは不明であるが、左平太はその年の十月三日に死去しているため、その四か月の間に読んだと思われる。

1、伊勢佐太郎書翰の内容

前号で紹介した²³「A134 伊勢佐太郎書翰」(在米、明治六[1873]年十月二十日)・宿元宛(母上・つせ・多満・時雄・宮)には、「従四位様」(細川[長岡]護美)について、つぎのように書き送っていた。

一、従四位様(細川[長岡]護美)様にも益す御機嫌克(よ)く、先日より「当地」(ワシントン)の様に御転学遊ばされ、当時は私御同居申し上げ居り、賑しき事に御座候。其の外菅野(神戸海軍操練所生で官費留学生・菅野覚兵衛)等も当地へ参る列(仲間)にて、同人には先年神戸以来の知人にて、追々夕景(夕方)等は出会い、いつも御地の御噂共仕り候事に御座候

また「二白」(追伸)では、次第に寒くなるので、「随分御保養御専一」を禱(いの)っている云々の後に、今便は「先

日従四位様御一緒に写真をとり候間、一枚さし上げ申し上げ候」と記すなど、親しき間柄になっていた。

さらに「従四位様にも、来夏(明治七〔1874〕年夏、明治七年五月四日)は早々「欧羅巴」(ヨーロッパ)の様に御渡り、同所へ又た一年計りも御滞学の思召しにて在り為され候間、御帰朝は多分「再来秋」(明治八〔1875〕年)にも相成り申すべきかと存じ奉り候」と書き加えていたが、結果的には既述の通り明治十二(1879)年一月十日の帰国であった。

2、細川護美の英国留学

書翰の最初で、細川護美は左平太のこれまでの「清安」(健やかな状態か)を賀した後、護美自身すでに「厄国」(アンゲリア、近世のイギリスの呼称)に留学していることを知らせ、「休慮」(安心)されたいと記す。

そして留学先の「厄国」(イギリス)は「近来は天気も順和」であり、愈よ以て壮健で「勉学」に励んでいること、「亜」(アメリカ)国に「滞在」していた時とは「雲泥の相違」であり、「安慮」(安心)されたいと記す。

前号で紹介した²³A134「伊勢佐太郎書翰」の明治六(1873)年十月二十日頃、即ちワシントンに「転学」後の護美は、健康状態も勉学の意欲も一時的にしろ落ちていたのかもしれない。あるいはそれが急遽「英国留学」を決意した理由であったかもしれない。イギリスでの護美はまったく違い、すべてに積極的であった。イギリスの「水が合った」のであろう。

護美が英国での生活のすべてに満足していることは書翰から十分垣間見ることができる。しかし護美は何故に英国留学を決断したのか、またその本当の目的と意図が一体奈辺にあったのかも、護美自らが細切れに語っている。それを拾い集めることで、護美の英国留学への決意の全体が見えてくる。

3、「厄国」(イギリス)での勉学環境

細川護美は「厄国」(イギリス)での留学の状況を「教師も誠に兄弟の如く相交り」、その傍らに「寓」(仮住い)していた。その場所は「龍動」(ロンドン)府ではあるが、凡そ六十里(英里・マイル〔哩〕、60哩≒96.5km)の「南隅の海村」であり、「学問の為には至極宜しく」云々と記す。

前の『長岡雲海公傳』第三巻「第九章 洋行時代」には、明治七年六月十二日より明治八年十一月十日まで「クロイトン(クロイドン〔Croydon〕、ロンドン府の南端)留学」とあ

ったが、この書翰には「龍動」(ロンドン)府(都心・シティ)より凡そ「六十里」の「南隅の海村」と記し、その村名は記されていない。

いずれもロンドン府から遠くないが、「クロイトン」(クロイドン〔Croydon〕)は、むしろロンドンから25kmほど離れた内陸部の郊外緑地帯で、この書翰に記された「海村」ではなく、その位置も合致しない。

そこで「龍動」(ロンドン)から、この距離と方向に合う「南隅の海村」をインターネットで探してみた。すると「現在イングランド南部にある海辺の街ブライトンはイギリスでも有数の海浜リゾート地で、年間をとおしてたくさん観光客が訪れ、ビーチがあるため夏季は特に人で賑わう。現在首都ロンドンからは電車で約一時間。ロンドンに比べ街自体小さいが、歴史的建築物や博物館、ショッピングセンター、パブ、レストラン、カフェなどの施設が充実、オシャレな海辺の街としてイギリスでも人気のエリア」と紹介されていた。

この説明の「南部にある海辺の街」と「首都ロンドンから現在電車で約1時間」という条件は、書翰の「南隅の海村」に該当する「ブライトン」〔Brighton〕ではないか。おそらく「クロイトン」は「ブライトン」の誤記ではないかとも推測しているが如何。乞教示。

細川護美は、その「南隅の海村」(ブライトン)で、昨十月(明治七〔1874〕年十月)に「英」(イギリス)の歴史等の他に、経済書等に関する教師たちを三人も雇い、その三人を相手に、五月四日の英国留学後、五か月ほど経った時期から勉学を始めていた。さらに別に「過月」(先月)即ち明治八年四月初めには「仏(フランス人)の教師」を雇ったと記す。英国での護美は、このように複数の英・仏人の「御雇い教師」を相手に、まったく金に糸目を付けない、何とも贅沢な留学環境にあったことがわかる。

4、「イギリスの自由貿易帝国主義」

細川護美の英国留学時代(1874~1879)は、19世紀後半にあたるが、その当時のイギリスはどんな状況にあったのだろうか。その時代のイギリスの歴史・政治・経済・文化などの国情に関して、『世界史B』(実教出版 2018年度用)の教科書一部を引用しておきたい。

(1)『世界史B』

この教科書では、「ヴィクトリア女王」(1819~1901、在

位1837～1901)の治世として説明されていた。但し〔 〕は脚注、()は引用者註。

19世紀の後半のイギリスは、ヴィクトリア女王の治世(ヴィクトリア朝)のもとで黄金期をむかえた。1851年のロンドン万国博覧会に登場した水晶宮(クリスタルパレス)は、イギリスの経済力を世界に誇示するものであった。[万博はこれ以降も帝国の工業力・技術力を展示する場として大きな役割をはたした]

トリー・ホイッグ両党はそれぞれ保守党・自由党となって、二大政党による議会政治が定着し、諸改革がおこなわれた。(ヴィクトリア女王は「君臨すれども統治せず」という原則で、議会制民主主義を貫いた。)

1867年には第2回選挙法改正で都市労働者が、1884年には第3回選挙改正で農業・鉱業労働者が選挙権を獲得した。こうした動きに呼応し、公立学校の初等教育を定めた教育法や、労働者を体制内に組みこむため、組合活動を合理化する労働組合法が定められた。

この時期のイギリスは、産業革命がもたらした圧倒的な工業生産力により、「世界の工場」とよばれた。[この状態は長く続かず、工業製品の輸出ではなく、外国政府などへの融資により大きな収益をあげた。その担い手は金融業に進出したジェントリー〔ジェントルマン〕であった。]

その経済力と強大な海軍力を背景にして、イギリスは諸外国に自由貿易の実施を強く求めるとともに、植民地を拡大していった。このような動きを自由貿易帝国主義という。

保守党・自由党はともに、植民地支配の拡大によって帝国を発展させるという点では共通していた。保守党のディズレーリは、1875年にスエズ運河株式会社の株を買収し、1877年にはヴィクトリア女王を皇帝とするインド帝国(大英帝国の母)を創設した。一方、自由党は、かつてアヘン戦争を批判したグラッドストーンが活躍し、1882年にエジプトを事実上の保護国とした。

この教科書から、当時のイギリス帝国を象徴する歴史用語を拾ってみると、「ヴィクトリア朝」・「黄金期」・「ロンドン万国博覧会」・「水晶宮(クリスタルパレス)」・「二大政党」・「議会制民主主義」・「君臨すれども統治せず」・「農

業・鉱業労働者が選挙権を獲得」・「公立学校の初等教育」・「労働組合法」・「産業革命」・「世界の工場」・「外国政府などへの融資」・「ジェントルマン」・「海軍力」・「植民地を拡大」・「自由貿易帝国主義」・「大英帝国の母」・「アヘン戦争」など、実に盛り沢山であり、それが世界に冠たる「大英帝国」の姿であったことがよくわかる。

(2)『世界の歴史』22

——「ヴィクトリア時代イギリスの光と影」

また北川稔・北原敦・鈴木健夫・村岡健次著『世界の歴史』22(中央公論社 1999年)の「近代ヨーロッパの情熱と苦悩」を見ると、イギリスを「多重的・分権的統合モデル」ととらえていた。

第4部「ヴィクトリア時代イギリスの光と影」を担当した村岡健次は、「ヴィクトリア女王」(1819～1901)の時代のイギリスの特徴を、つぎのように解説していた。個人的な見解を追記・補足しながら見ていきたい。

十九世紀後半は、イギリスの「繁栄の時代」(1851～73)即ち絶頂期であると同時に、イギリス国民の間に「帝国意識」が高揚(1870年代)して、「イギリス帝国主義」(1870～1900)の出現に繋がっていた。その後「自由貿易帝国主義」(1870～1900)が発展し、海外市場の積極的獲得に乗り出し、世界の「植民地帝国」(大英帝国)を、世界に先駆けて実現した時期であった。

①世界最初の「産業革命」

具体的には、十九世紀以前の「ジェントルマン」(ジェントリー、大土地所有者)による「農業中心」(前工業化)時代と違い、新たに「蒸気機関」の発明と実用化により、世界最初の「産業革命」(1830～40年の工業化)を実現した。

またイギリスには、先進国としてすでに植民地を所有する帝國的要素があった。それが「産業革命」により、繊維産業では製品の大量生産が可能になり、その販路を拡大する「商業国家」となった。

②「自由貿易帝国主義」

その「商業国家」の下で通商・金融関係の能力を発揮し、さらに諸外国としての力を削って「海外市場の獲得」に勝利し、「自由貿易帝国主義」によるインドなどの「海外植民地化」を推し進め、ヴィクトリア女王を「大英帝国の母」と称し、その名のもとに「世界経済の覇者」となった。

③「ブルジョア」と「プロレタリア」の出現

イギリス国内では「産業革命」による工業化の進展で、従

来の「ジェントルマン」(大土地所有者)に加え、新たに「ブルジョア」(資本家・経営者)と「プロレタリア」(賃金労働者・従業員)が出現し、イギリスでは「三者対立状態」が展開することになった。

④マルクスとエンゲルス

この状況下で、マルクスとエンゲルスは、ブルジョアジーとプロレタリアートの経済的な対立、その原因として、前者の「労働」観と後者の「労働力」観との間に根本的な違いがあることに着眼した。即ちプロレタリアートの「労働力」による「剰余価値」即ち「付加価値」こそが、ブルジョアジーの「利益」を生み出す根源であること、その価値評価の差異とその「利益」の配分をめぐる、必然的に「階級闘争」が誘発されるとした。これらの過程と状況の分析を下に「科学的社会主義」の基本的理論を提唱した。

⑤「議会制民主主義」

また「産業革命」後のイギリスでは、政治体制そのものが「二大政党」(保守党・自由党)に大きく変化し、「議会制民主主義」が確立・重視された。その一方で、従来の伝統的な「王制の存続」は、変形的な「君民同治」即ち「君臨すれども統治せず」のもとで保証された。

一方実際の政治は、「議院内閣制」と「二院制」(貴族院・庶民院)で実施され、そのために「選挙制度」の導入・改正を繰り返しながら、政治の民主化が進行した。即ち政府の指導部は、以前の「貴族政党」から「自由保守・名望家政党」、さらに「産業革命」による貧富の差が社会問題化する中で、1900年頃には「労働党」が無視できなくなった。

⑥「自由主義的な風潮」

また国内では、「自由主義的な風潮」が謳歌され、「産業革命」での技術革新もあり、労働者階級に余暇が生まれ、イギリス発祥のサッカーの誕生に繋がった。さらに国民の中では、中流階級の「ジェントルマン」指向が生じ、それに見合う「エリート教育」が強く求められ、教育熱も増大した。

⑦「ヴィクトリアニズム」

このようなイギリスの社会風潮は、「ヴィクトリアニズム」、即ち従来の上層階級であった「ジェントルマン」(大地主層)に代わって、新しい中流階級である「ブルジョアジー」(工業経営層)の文化が支配的となった。後者は「資本主義の精神」(キリスト教の職業召命観による利益追求の是認)を経営理念とし、さらに「実学」を尊重、また「勤勉」「節約」「自助の倫理」をもとに「独立独行の気概」を身に付けていった。

(3) 細川護美の「英国留学」選択の背景

細川護美が渡英した時期は、まさにそんな「ヴィクトリア女王」(1819~1901)の治世の最中であつた。『広辞苑』では、この時代のイギリスを、「憲政が著しく発達し、世界商工業の覇権を握って、国力を増進させ、植民地は全世界にまたがり、文芸はヴィクトリア朝時代と一時期を画した」と簡潔に説明している。

護美が英国留学を希求した背景には、このような世界に誇る「大英帝国」の絶頂期にあつたイギリスを実体験することがあつたと思われる。護美の通算5年間のイギリスでの留学期間が、「ヴィクトリア期」と重なっていたことにより、護美自身がさらに意識的に「英」の歴史(イギリス史)や経済書などを本気で学ぼうとした背景とその理由ではなかったのか。

おそらく護美は英国留学を通して、米国留学では経験できなかったイギリスの「帝国主義国家」の現状を直に体験し、そこから何かを学び取りたかつたのであろう。護美の書翰にはそんな思いは示す言葉は見当たらないが、護美がこの英国留学をより完全なものにしようと、糸目をつけず英仏の教師たちを「御雇い」とした目的はここにあつたのではないか。

(4) 細川護美自ら「ジェントルマン」視

細川護美は「ヴィクトリア女王」期のイギリスで、一体どのような視線で以って、何を学ぼうとしたのか、少しでも明らかにできる方法はないのか。その模索の中で、方法論として、日・英両国の「封建社会」に着目してみた。

当然ながら、日英の「封建社会」や「封建体制」には、その成立過程ばかりでなく、制度そのものかなりの差異があつて、単純に比較はできない。あくまでも個人的な推測的見解であることを断っておきたい。

その上で、護美の出自に着目してみた。護美は肥後十二代藩主斉護(封建領主・大土地所有層)の御曹司で、華族制度では明治十七(1884)年に「男爵」、同二十四(1891)年に「子爵」を授与されることになる。

おそらく護美は自らの身分を、イギリスの上・中流階級(アッパー・ミドルクラス)の「ジェントルマン」(紳士、大地主・大土地所有層、サー[sir、準男爵]の称号)に対比してみたのではないか。

「ジェントルマン」(ジェントリー)とは、国語辞典に「貴族の位階ではないが、紋章を許されたもの。土地所有者、郷

紳」とあるが、本来先祖代々の大土地所有者であること、またその家柄は血筋をより重視する傾向があったと言われる。インターネットには、さらに「自身の信念に揺るぎない自信を持ち、その信念を尊重すると同時に、周囲の人への思いやりや、慎み深さを忘れないこと」も追加されていた。これらの「ジェントルマン」(ジェントリー)の規準に、細川護美に当てはまるのではないか。

『世界史大事典』などによれば、「ジェントルマン」(ジェントリー)は「中産階級上層部」を構成した「近代的農業資本主義経営者」(第一次囲み込みの推進主体)であり、同時に「産業資本家」(毛織物工業への投資)であった。即ち領主的土地所有者として、政治的には「半封建」的な保守者であり、近代的経営者として「半近代」的な面も持っていた。

「ジェントルマン」(ジェントリー)は「市民革命」期から「産業革命」までのイギリス議会の指導的役割を果たした「歴史的階層」と位置付けられていた。藩主御曹司の護美の「幕藩体制」から「明治維新」にかけての「半封建」と「半近代」の両方を包含した存在は、まさしくこの身分と立場に該当すると、自覚し自認、あるいは自任していたのではないか。

この時期のイギリスでは「自由主義的な風潮」が謳歌され、多く者が憧れて中流階級「ジェントルマン」を指向し、「エリート教育」を強く意識する傾向があった。護美は、そんな教育環境に遭遇し、ますます自らの「ジェントルマン」指向に拍車をかけ、彼なりに「ジェントルマン」との完全な同一化というよりも一体化を重視する志向と願望が強まっていたのではなかったか。

即ち護美は自らの出自を意識し、米国留学と違ったイギリス特有の国情(御国柄)こそが、自分に一番よく似合っていたことを、英国留学を通して自覚し直し、また「ジェントルマン」(英国紳士)たらんとして、自ら徹底した「エリート教育」から多くを学び取ると決意したのではないか。

5、英文学への興味

細川護美は、自分の英文の力量は別紙の三冊にて「笑察」(「推察」の謙譲語)してほしいと記す。「政体律令書」(イギリスの政治・国家組織、共和制と君主制の並存、近代法制を指すか)の著述が、自分の以前からの目的であったと、護美は自らの言葉で、英国留学の目的の一つであったと吐露する。

しかし、そうであるはずの護美は、最近では文学の味わいも深く感じ、夜に「シエキスピヤ」(シェークスピア

William Shakespeare 1564～1616)、且つ「ノーヴェル」(ノベル[novel]、長編小説)等に「眼をさらし」(くまなく見る)にしている。「来夏」(明治九〔1876〕年夏)に「帰様」(帰国・帰郷)の節には、左平太を絶対「失望」させないように心掛けていと追加している。

護美自身、英語力はかなり高かつ自信もあり、十分会話することができた。しかし護美も最初は米国留学中には、「私は夫から亜米利加に二年居て、其中一年は華聖頓府に居た。但し通譯も連れて居らぬから、悉く字引からくらねばならぬ譯で、漸く言葉の分る様になってから、華聖頓に行った」(「史談速記録・未刊」)とその実情を吐露している。

その護美が、いまやシェークスピアの作品やノベル(長編小説)にも興味があり、片端から読破する程であった。もちろん英国留学の成果を左平太に強調して披歴したいとの気持ちからかもしれない。しかしそれでも護美が十分な語学力を身に着けていたのは確かである。

また護美が「賢兄」(左平太)を思う事は切実(半端ではない)で、「帰朝の念」(帰国したい思い)は素よりあるけれども、イギリスでの「勉学」は亦味わい深く、自分の本意は「今三年」(これから三年間)ほど「滞英」(イギリス留学の継続)したい。しかしその一方で、「母」(生母、家臣飯洞氏女・長)のことも気になっていて、「如何んともせず」(どうしようもできなくて)、「先ず帰朝に決し」ていることを打ち明けている。

今般「馬場氏」が帰朝となり「幸便」であるので、同氏に託し、自分の情報について、「旧知事公」(細川護久)に伝言を依頼することにしたとも記す。この「馬場氏」は後に自由民権運動の指導者的存在となる馬場辰猪と推定している。その根拠を示しておきたい。

馬場辰猪(1850～1888)は、明治三(1870)年の土佐藩の藩命で、英国留学して法学を学ぶ。第一回目の英国留学では明治七(1874)年十二月に帰国、その後翌八(1875)年六月に第二回目の留学をした。しかし同年三か月ほど一時帰国、その後は明治十一(1878)年五月に帰国している。

護美と馬場辰猪は同時期にイギリスに滞在した。その馬場が一時帰国の際に、護美は「旧知事公」(細川護久)への伝言を託したものと思われる。後掲の「尤馬場(馬場辰猪)龍働(ままた、龍動(ロンドン)、遠からず着英)云々は、その一時帰国後の再留学を指すと思われるが如何。

6、「仏語学」(フランス語)の勉強理由

細川護美は「当八月」(明治八〔1875〕年八月)初旬より各国へ「経歴」(遍歴)するので、「仏語学」(フランス語)を勉強している。「如何となれば」(その理由は)、英里(まゝ、離か、英離)後、「即下」(すぐさま)フランス語が出来なくては、「スウキツ」(スイス)の「彼の」(あの有名な)アルプス山も見物するのに「都合宜しからず」(不都合)と記す。

その行程はイギリス→パリ→スイス・アルプス登山→セダン→ベルギー→パリ→ロンドンであり、その約三か月の体験を『大陸紀行記』(英文)として、ロンドンで出版(London, December 1875)している。その全文が『長岡雲海公傳附録』巻一の巻末に「A TOUR ON THE CONTINENT BY M. Y. NAGAOKA OF JAPAN」として収録されているので一読されたい。

仍って「帰様」(帰国・帰郷)の節は「サラツハムプトン」(サウサンプトン〔Southampton〕)より乗船、「ジブラルタル」(ジブラルタル海峡)を「交廻」(経由航海)することに決している。「サウサンプトン」(Southampton)は1620年の「メーフラワー号」の出港の地で、米国への大西洋横航路の起点であったが、当時は「ジブラルタル」(ジブラルタル海峡)経由での東洋への航路の起点でもあったことがわかる。

7、帰国後の楽しみなど

日本に到着後には、平山和尚(平山成信か)・管野大英雄(菅野覚兵衛 1842~93、海軍官費留学生、明治七〔1874〕年帰国・海軍少尉)・白根雄談書(白根専一 1849~98、官僚・政治家、通信大臣等歴任・男爵)等が「無事」であろうから、「芙蓉峰」(富士山)の辺りを見て廻り、一盃を取り酌み交わす事と考えている。

平山和尚・管野大英雄・白根雄談書の各人について、おそらく細川護美が平山を「和尚」、管野を「大英雄」、白根を「雄談書」等と、何れもその姓にその人物の特徴を付けて、あだ名(ニックネーム)風に呼ぶほど懇意の間柄で、気心のよく知れた人物との再会を楽しみにしていたことがわかる。

また坪井氏(坪井伊助 1843~1925、篤農家、竹林博士)の新婚の記事を新聞紙で一覧したが、「堪えざる一笑」(笑止もの)であると言う。余程美人のよしにて、最早「黒奴(まゝ、黒土か)の愛」は止(や)められた事と呈察していると記す。この「黒奴の愛」は「黒土の愛」の誤記か、「黒土の愛」であれば、坪井が篤農家で「竹林博士」と称され、土壌研究に熱心との意に解すこともできるが如何。

これらの人名は色々調べて比定しているつもりであるが、その真否には自信がない。是非乞教示。

英国留学の護美には、「亜国の所置」(アメリカ留学中の状況の意か)のようなことは「夢にも見えず」(まったくなく)、「昨十月」(明治七〔1874〕年十月)来の勉学は、恐らく「英国九生」(九人の英国留学生)に「肩を譲り」(負けること)、即ち少しも負けていないと自信のほどを披歴している。

この「英国九生」とは誰か。「文学社」で交流のあった井賀陽太郎(伊賀陽太郎)・菊池大八(大麓)、原六郎、その他「鍋島兄弟」(直虎・直柔)・馬場(馬場辰猪)などではないかと推測している。

8、「普仏戦争」(独仏戦争)の経緯

ついで「普仏戦争」(独仏戦争、1870~71)の経緯について記す。仏と日(日耳曼列国〔ゼルマニア〕、ゲルマン、ドイツ)の間で、再び戦争が起こったけれども、英・魯(プロシア)等の「取捌き」(仲介処理・仲裁)で、「先ず」(ひとまず)中止になった。

尤「魯帝」(プロシア皇帝)の尽力は、余程「日」(ドイツ)に貫徹(最初から最後まで大きな影響を与える)したかのように見えるが、数年を待たずして、此の状態であれば、必ず再発する情勢である。「西班牙」(スペイン)の「新主」は、今に勢いを次第に増して、向後はどうなるか見当が付かない。「普仏戦争」の発端とその経緯と1875年段階での現状について、護美がその見解と感想を記していた。

ここで「普仏戦争」(独仏戦争)についてまとめておきたい。

1868年のスペイン女王イサベル二世の廃位後、空白のスペインで新国王に、プロシア王家〔ホーエンツォレルン家〕の遠縁レオポルドの継承問題が起こり、ナポレオン三世が異議を唱え、選出問題をめぐって紛争の発端となった。

プロイセンの首相ビスマルクはこの機をとらえ、「エムス電報作戦」(1870年7月、エムス滞在中のプロイセン王ウィルヘルム一世をフランス大使ベネデッティが訪問し、スペイン王位問題に関して会談したと報じた電報を、ビスマルクが改竄して新聞発表し、反フランス的世論を誘導した事件)などの巧妙な外交手段で、フランス側に宣戦布告を誘導、1870~1871年にプロイセン(プロシア)を主とするドイツ諸邦とフランスの両国間の戦争(「プロイセン=フランス戦争」)が始まった。

この「普仏戦争」でビスマルクが連戦連勝して圧勝、1870年9月ナポレオン三世は「セダンの戦い」で敗北・退

位させられて、第二次帝政は崩壊した。フランスのパリで第三次共和制が発足、フランス・ドイツ間で1871年5月「フランクフルト条約」を締結、フランスはアルザス・ロレーヌの大部分を割譲、賠償金五十億フランを支払った。

一方ビスマルクはドイツの統一を達成し、戦争終結直前の1871年1月に、プロイセン王ウィルヘルム一世がヴェルサイユ宮殿でドイツ皇帝に即位、ドイツ統一が完成し、ドイツ帝国が成立した。

9、左平太は今頃「海軍大輔」か

「本邦」（日本国）の「今日の形状」を承知しているならば「報知」してほしいと記す。

滞英中の護美には、如何に日本の国情、まして肥後の状況が入手できなかった理由は何か。その背景について、護美自身、つぎのように言っている。

「私は舊臣からも、藩の方の朋友あたりからも、一向手紙が来ぬ、夫れは半ば固い方の手合は、舊藩主に直きに手紙を遣るも恐縮の次第であると云ふ古い考へと、又欧羅巴は今の様な近いと云ふ考へがないから、手紙を遣るのもおっくうで、私共も親族に一年に一度か二度しか手紙を出さぬ、(中略)最も一度二度手紙を寄越した者もあった、いづれも事が破れた後であった。」

事実その実態が、賢兄（左平太）は「即今」（今頃）「海軍大輔」（海軍大輔は海軍卿の下で、海軍省のナンバー2）に叙せられているものと察している。御一笑（にっこりするほど満足するの意か）のことであろうという文言に表れていた。前述のように、帰国した左平太は明治八（1875）年六月に「元老院権少書記官」に任じられていた。

10、スコットランド地方の「独遊」

「昨夏」（明治七〔1874〕年夏）の「スコットランド」（スコットランド）地方の「独遊」（一人旅）では、英語が便利で役に立ったが、今般は先ず「仏語がち」（フランス語圏に近いの意か）である。しかし是非七月までには、自分が「亜」（アメリカ）にいた時の英語丈け（ぐらい）には、フランス語を「仕付け」（身に付けれる）「企て」（計画）である。護美はヨーロッパ語の習得に積極的であり、またかなり自由に使用できるようになっていた。

護美の旅行は、この「スコットランド」に限らず、ほとんどが「独遊」（一人旅）であった。前掲の『英文・大陸紀行』の中で、護美は“I arrived at any hotel early in the evening,

it was my custom to go out and visit the interesting objects of place, or to talk with some other traveller.”と記し、一人で外出・探訪するのが“my custom”（習慣）と、性癖に近い「単独行動」を好んで採っていた。

また護美は、帰国直前の話として、「ロンドンから英吉利中、蘇格蘭（スコットランド）も愛爾蘭（アイルランド）も知って居る、旅行から言へば随分歩いた、英吉利中でも私ほど歩かぬ者がある、燈臺下暗して、餘り歩かぬ、私は暇さへあれば歩いた、大概一人で歩いた」（「史談速記録・未刊」）と記す。

11、細川護美と岩男俊貞

岩男（俊貞）氏も帰国後は「無事勉学」に励まれているだろうか。素より細川護美が英国へ「独り通い」（単独留学）をしてしまったので、同人に「凶事」（凶事、謀、将来の計画の意か）などが出来た節は「重畳世話」をするので安心されたい。

この「独り通い」（単独留学）も、護美の“my custom”（習慣）による「単独行動癖」に起因していたのかもしれない。そうすると、以下に記した護美の岩男俊貞への対応もわかるような気がする。

自分は岩男俊貞と「即今（現在）態と（わざと、意識的に）あまり出会い（連絡）」をしないているが、自分の真意（英国留学が本命であったこと）については「賢兄」（左平太）は能く承知しているように、決して到底「彼人」（岩男俊貞）に対し、「兎角の存意」（何か特別の考えや思い）があるわけでは全くない。このことについては「面会の上一笑」（面会すればすぐに了解し合えるの意か）のはずである。

しかし俊貞先生等に会い、万一「彼」（俊貞）の眼前で「了解」したことを以って、「兎角の通信」（あれやこれやの連絡）等をされても、自分の本意に合致しないので、このことを賢兄には含み置いてほしい。

帰朝したらお互いに「笑いに崩れる」ことであろう。自分からはこれ以上岩男俊貞と関係しないことについては、他日（いつか別の日）「友人等の談話」も聞かれてほしい。

何様「昨年」（明治七〔1874〕年）に、岩男俊貞に別途に費用を渡しているの、今再び自分から別途に金銭を渡すことは少しも名義が立たない。殊に「当人」（俊貞）が「一トシメ」（一締め、さらに一段）と「苦慮」（困窮）するような時は、「他日の為」と考えていることもあるので「呈察」（推察）されたい。

何様この上は「彼人」(俊貞)の望む丈け、「滞英勉学」(英国留学)ができるように考えている。しかし自分の「独立」(単独留学)は深く「意中」(心の中で思っていること)にあるので安心されたい。即ち護美の“my custom”(習慣)即ち「単独行動癖」が強いことを知っていた左平太に理解を求めている。そしてまたどうか岩男には英国留学のためにも、英語等を十分修得・上達しておくように願っていると記している。

しかし細川護美は二人で滞米したのに、岩男俊貞を置き去り同然に、英国への単独留学をしたことを非常に気にしている。仮に「単独行動癖」によるものであっても、かなり弁解がましい文言が再三記されている。その背景を再度見とおきたい。

岩男俊貞(未詳～1883)は横井小楠の門弟で、横井左平太・大平と共に、勝海舟の「神戸海軍操練所」に入所した人物であった。明治四(1871)年に、大平からは「熊本洋学校」創設の相談も受けている。また翌五(1872)年二月(ま、一月)には、フルベッキの紹介で、細川護美付き添いの供人(ともびと)として渡米することになった。

細川護美の明治五(1872)年一月の米国留学には、岩男俊貞と弟三郎が同行していた。その後岩男俊貞は、明治七(1874)年四月十七日まで行動を共にしていたが、明治七(1874)年十月になると、細川護美は突如単身での英国留学を執行した。

おそらく護美は岩男俊貞にはまったく相談していなかったのではないか。岩男にとってはまさに「寝耳に水」の護美の決意にさぞ動揺したことであろう。

しかし前号で紹介した明治六(1873)年十月二十日の宿許への「A134 伊勢佐太郎書翰」には、岩男の滞米留学の終結は、「当地留学生等」に「当地」(ワシントン)の「日本公使館」より「三十六名」の「帰朝の御発令」があり、その中に「岩男俊貞氏」の名があったこと、そして岩男は十月二十日に「新約克」(ニューヨーク)を出帆して帰朝したことが記されていた。

護美は、明治六(1873)年十月二十日には帰国していた岩男に対して、明治七〔1874〕年に、すでに別途ながしかの金銭を渡し、渡英の準備費用を提供していたのだが、護美は単独での英国留学を実施したことを、人知れず申し訳なく思い、脳裏から離れずにいたのであろう。岩男と気心の知れた間柄の左平太に、その偽らざる心境を吐露し聞いてもらいたかったのかもしれない。

江戸期であれば、細川藩主家系の主人格にあたる護美が

取る態度ではなかったが、しかし明治になって、護美の気持ちは格下の岩男に対しても、このような気の使い方をしている。確かに「時代が変わった」と実感できる。すこし深読みかもしれないが、護美が左平太にこの書翰を認めた目的の一つに、この岩男俊貞への間接的な弁解があったのかもしれない。

12、英国留学での日本人交流

細川護美は「当時」(現在)のイギリスで、井賀陽太郎兄(伊賀陽太郎、土佐藩家老宿毛領主氏成の子、明治五〔1872〕年私費留学)・菊池大八(大麓、江戸生まれ、箕作阮甫の養子秋坪の次男、父の実家菊池家養子。蕃書調所で英語修学、最初中村敬宇と共に渡英、明治三〔1870〕年～十〔1877〕年に再渡英、ケンブリッジ大学で数学を学ぶ、当時在学中)・原六郎(兵庫、進藤六右衛門六男、原丈右衛門養子。後に東京貯蔵銀行創立者、帝国商業銀行会長、横浜正金銀行、帝国ホテル、東武鉄道各取締役、維新後欧米に留学して銀行論を学び、明治十年帰国。十一年第百国立銀行創立に参加)等と「文学社」の仲間として、時折文通をしているが、その他には差して文通等もしていないと記す。

その他「鍋島兄弟」(明治六〔1873〕年、肥前藩主鍋島直正の七男弟直虎〔子爵・武家・小城藩7万石〕・八男直柔〔なおとう、子爵・武家・蒲池藩5万石〕)がともにイギリス留学)とは時々相互に往来しているが、尤自分は「龍動」(ロンドン)にも一月一度日帰りで出張(出遊)っている程度であるが、彼の兄弟は代る代るロンドンに出て来ているという。「来秋」(明治九〔1876〕年秋)には「拜語」(拜見して語り合う)するので、山海の如く「談説」(話の種)を貯えておきたい。俊貞(岩男俊貞)先生との議論も楽しみにしておるので、宜しく「一声」(ひと声かける)してほしいと頼んでいる。

13、「政事学」(人民進歩の基)の修得

細川護美は「亜」(アメリカ)国での「在留」(滞米留学)の節と違い、再び壮健になり、再び「論客」になっていると記す。しかし今度は「政事の議論」を受けないことにしているので、「別紙三冊」(未公開の「政事の議論」)の「面」(冊子)によって遠察(間接的に推測)されたい。この「別紙三冊」について、末尾に「別紙三冊は一月後便、出板(出版)の上差出し申し候」と記し、一月(明治九(1876)年)に後便で、「出板」(出版)後に送るとしている。

細川護美の「強意」(一番強い興味の意か)は先ず「政事

論」であるが、「容易(たやすく)に議し」たりすることはないけれど、「政事論」は「人民進歩の基い」で、「学の起る処」(基盤)であるので尽力したいと考えている。

さらに「今二年滞英」の延長が出来れば、井上(井上毅、司法省から1872年仏・独派遣司法省、子爵・勲功・長岡監物家臣)や内賀田(不詳)等の「法律論」を是非聴聞(意見を聞くこと)したいという。「政事論」では「法律の本体」を知ることが「要」(最重要)と考えていると記す。この法律学への関心が、前述した「ミッドルテンブル」での「法学状師(ハリストル)の学位」の取得に繋がったと思われる。

「雑技」(いろんな学説の意か)は素より知らなければならぬが、「雑技」は時によって変遷するものである。この議論はいま深く味わっているもので、面会の節に言上するつもりである。

細川護美は明治八(1875)年の段階で、「今二年(あと二年)滞英」、即ち明治十(1877)年まで延長が出来れば、井上毅や内賀田等の「法律論」を聴聞したいと記していた。

但し「井上毅」は明治五年～六(1872～73)年のフランス・ドイツに留学、日本国家の形成について法制官僚としての法の知識を身につけて帰国した。確かに「法律論」が専門であったが、この書翰が記された明治八(1875)年にはすでに帰国していて、滞英していた形跡はない。そうするとこの「井上」は別の人物か。乞御教示。

14、「知己の面々へ御一声」

知己(親友・知人)の面々、特に元田(永孚、侍講)・山田(武甫〔五次郎〕、小楠門弟・四天王〔徳〕、熊本県権参事、公議政党創立委員)・大田黒(惟信〔亥和太〕、藩士、熊本県少参事、後に県民会議長)等にも宜しく「一声」を願いたい。

何れ遠からず米田(是容・虎雄〔虎之助〕)等へは一紙差し送る筈である。しかし今は差して「簡要の事」(大切なこと)もないので、兎角「等閑」(のんびり)に打ち過ごしている。「匆々及ばず」(取り急ぎ走り書きで、意を尽していないの意か)。

さらに最尾には、前述した「別紙三冊」(未公開の「政事の議論」)は一月(明治九(1876)年一月)に後便で、「出版」(出版)次第送りたいと追記している。

15、「亘りて」(追伸)

今回は「拙も」(どうしても)一応帰朝しなくてはならないと考え、すでに決定している。自分は英国より直に「来夏」

(明治九〔1876〕年)上旬の四月六日に乗船の覚悟であるが、万一は今一年(後一年、明治十〔1877〕年まで)「滞英」等の「催議」(留学延長のことか)にでもなれば、「此の上無く」喜ばしいことであるが、自分としては「竟に」(ついに、既に)帰朝を決しており、後は「命」(政府の帰国命令)を俟っているところである。

護美は英国留学期間をさらに二年間延長し、少なくとも明治十(1877)年まで滞英したいとの願望が強かったが、しかし生母(家臣飯洞氏女・長)のことが気掛かりで、明治九〔1876〕年四月には帰国することを決断していた。

その護美にとって、「半途」(中途半端)の帰国になることが、其の「遺憾」(残念なこと)なこと「限りなし」と嘆き、その一方では「親を思うの情も亦た切なり」との板ばさみで呻吟していた。自らのこの両方の真意を左平太に正直に吐露している。

しかしその後の護美は前述したように、明治十一(1878)年の秋に「ミッドルテンブル」での「法学状師(ハリストル)の学位」を取得し、その冬には帰途につき、翌十二(1879)年一月十日に帰朝している。護美は八年にわたる米国・英国留学を無事終えることになる。

16、横縦書きの追加文(写真1 長岡護美書翰 五枚目〔下〕)

帰朝が最初の予定より遅れ、「来夏」(明治九〔1876〕年夏)上旬の第四月二旬(11日～20日の間)に許されて、発船となれば「五月末或は六月上旬」には支那海へ到着することになる。時期的には「至極の時候」(航海には最適の気象条件)で「海上平安」であるだろう。

この横縦書きの追加文をどう判断すればよいのか、その解釈に随分手間取ってしまった。そしてこの追加文はメモ書き風に帰国航程を想像した文であり、実際の航海中の経験を記したものではないと判断しているが如何。

17、封筒の裏書きの「Reciued」

封筒の裏に「長岡 Reciued(まま、Recitedか) July 20th 1875」の記載があった。「Reciued」は「Recited」の誤記で、「《略式》……を詳細に話す、《略式》……を列挙する、《英》(法律文書のなかで)……を説明する、《米やや古》(教師の質問)に答える」などの意味があるので「現地報告」と解しておいた。

書翰本文の日付と封筒の日付に約一か月のずれがあった。おそらく既述したように、信頼して託せる帰国者がやつ

と見つか、護美は託したその場で、裏書の日付「July 20th 1875」を記入したと推測している。

おわりに

細川護美の自費による英国留学での生活は、これまで見て来た伊勢佐太郎(左平太)・沼川三郎(大平)のアメリカ留学での生活とまったくその様相は違っていた。この護美書翰から、経済的にまったく心配のない、何とも悠々自適の留學生活の様子が十分読み取れる。両者の留學生活の差異の根底に何があったのか、その考察も必要であるが、ここでは割愛した。

またこの書翰の目的は、護美の英国留学中の「Recited」即ち「現地報告」であったことは間違いないが、ただ護美の岩男俊貞に関する記述が非常に気になる。判然としない面も残っているものの、岩男への護美の謝罪の思いが強く感じられる。おそらく護美が、左平太宛のこの書翰を思い立った要因の一つであったのではないかと推察している。

この書翰では、護美は「明治九(1876)年四月」には帰国すると自らも決定していた。その一方で、できれば滞英の期間を、少なくとも「明治十(1877)年」までと希望していた。しかし実際にはさらに二年間も延長が可能であった。

その二年間の延長があったことで、護美は英国留学の目的とした「法学状師の学位」を、明治十一(1878)年秋に取得することができ、翌十二(1879)年一月に無事帰朝することになる。それに比して、横井左平太の場合はどうだったのか。

前号で紹介したように、川村純義(当時海軍少将)が「ウィーン万国博覧会」に出張し、その帰路の明治六(1873)年九月中旬、ニューヨークに立ち寄った際、左平太はアメリカ留学の二年間の延長を懇願したが、まったく受け入れられなかった。

左平太は後二年間の留学延長が許可されていれば、ワシントンでの「海軍法律科」の修得を諦めずによかったのに、それが許されず、日本政府の帰国命令により、志半ばにして中断せざるを得なかった。もし左平太が「海軍法律科」を卒業していたら、また別の進路が開けていたかもしれない。

細川護美は「明治九(1876)年四月」の帰国決意から、さらに三年間もの留学期間の延期が可能であった。その背景に何があったのかを知りたいものである。

(次号につづく)

【参考文献】(本号分)

- 熊本県教育委員会編『熊本県近代文化功労者』(熊本県教育委員会 1981年)
- 熊本日日新聞社編『熊本県大百科事典』(1982年)
- 細川侯爵家編纂所編『長岡雲海公傳』巻三(民友社 1914年)
- 細川侯爵家編纂所編『長岡雲海公傳附録』巻一(民友社 1914年)
- 細川侯爵家編纂所編『長岡雲海公傳附録』巻五(民友社 1914年)
- 細川藩政史研究会編『熊本藩年表稿』(代表森田誠一 1974年)
- 高野和人編『肥後細川家分限帳』(青潮社歴史選書5 1991年)
- 前野直彬・石川忠久編『漢詩の解釈と鑑賞事典』(旺文社 1981年重版)
- 諸橋轍次著『中国古典名言事典』(講談社学術文庫 1993年第18刷)
- 細川家編纂所『改訂 肥後藩国事資料』(鳳文書館 1932年初版・1990年覆刻)
- 小田部雄仁次著『華族』(中公新書 2006年)
- ウィキペディア「日本の華族一覧」(Wikipedia)
- 高木不二著『幕末維新期の米国留学——横井左平太の海軍留学』(慶應義塾大学出版会 2015年)
- 田村栄太郎著『明治海軍の創始者 川村純義・中牟田倉之助傳』(日本軍事図書株式会社 1944年)
- 『世界史B』(実教出版 2018年度用)
- 北川稔・北原敦・鈴木健夫・村岡健次著『世界の歴史』22(中央公論社 1999年)
- 『広辞苑』他「国語辞典」類
- 菅野覚兵衛——Wikipedia
- ブライトン(Brighton) <https://ja.wikipedia.org/wiki/ブライトン>
- ミドル・テンプル(Middle Temple) <https://www.wikiwand.com/ja/wiki/ミドル・テンプル>
- ジェントルマン <https://shop-givenchybeauty.jp/gentleman-givenchy>
- サー(sir)——Wikipedia
- レオポルト・フォン・ホーエンツォレルン=ジグマリンゲン——Wikipedia
- 竹内理三編『日本史小辞典』(角川書店第二版 1978年)
- 三省堂編修所編『コンサイス人名辞典』日本編(1976年)
- 拙著「横井小楠と二甥左平太・大平の書翰を読む」全32回(熊本近代史研究会『近研会報』所収「くまもと近代史譚」2016年1月～2018年9月)
- 拙編「横井小楠同志・門人一覧」(私家版 2011年)

**Letters written by *Saheita*, Yokoi Tamako's husband,
and his younger brother *Daihei* before and after their stay
in the United States (10): from the archive of the family
Yokoi in the Kumamoto University**

TSUTSUMI Katsuhiko

This letter was written by Hosokawa Moriyoshi (細川護美) to Yokoi Saheita (横井左平太) in Japan. Moriyoshi's father was the lord of Higo han (肥後藩), and his elder brother Morihisa (護久) was the governor of Higo han. Moriyoshi was studying abroad at his own expense with Iwao Toshisada (岩男俊貞) and his young brother. Moriyoshi decided to study in England, but I do not understand the reason behind it.

He had nothing to worry about and his life was economically comfortable in England. It hugely differed from Yokoi Saheita's life in America.

Moriyoshi had a free, rich and leisurely life, and he enjoyed various new experiences. He wrote to Saheita it was right to study in England and reported about his daily life boastfully.

For example, he wrote about the conducive environment for studying, his interest in English literature, studying French, traveling alone in Scotland and sightseeing in the Alps, meeting Japanese friends in England, his interest in political science, and so on. He also wrote about the Industrial Revolution and the Franco-Prussian War.

However, Moriyoshi had a guilty conscience about leaving Iwao in America, and he told that he was ready to fulfill his responsibility. Meanwhile, Moriyoshi implied a strong self-justification to Iwao.

Moriyoshi planned to temporarily return to Japan for his mother and informed Saheita of a sea route he planned to follow. He told that he was looking forward to meeting many old friends again, and that he surmised that Saheita might be a senior vice minister of the navy of Japan as well.